

幕末・明治期の英文法における 'Gerund' の概念について

水野修身

The Realities and backgrounds of the Concept of *Gerund* in the Grammars of the Last Stage of the Edo Period and the Meiji Era

MIZUNO, Osami

Abstract

We can find the unconformity and the confusion with regard to the concept of 'Gerund' in the English grammars of the last stage of the Edo period and the Meiji Era; that is, it is considered that there were main three types of the concept of 'Gerund' in English grammars in those days, according to the writer's investigation on the English grammar books. They are the following types:

(1) to include Gerund under a kind of participle, (2) to include Gerund under a kind of participle, (3) to deal with Gerund as a kind of verbal by divorcing it from Participle or Infinitive.

This paper surveys realities of its concept in those days, and considers the backgrounds or origin over the unconformity or confusion about the concept of Gerund, referring to Prescriptive Grammar in England in the eighteenth century.

Keywords : the English Grammars of the Meiji Era
the Concepts of 'Gerund'
Some types of treatment of 'Gerund'

キーワード：明治期の英文法、動名詞の概念、動名詞の扱い方の諸タイプ

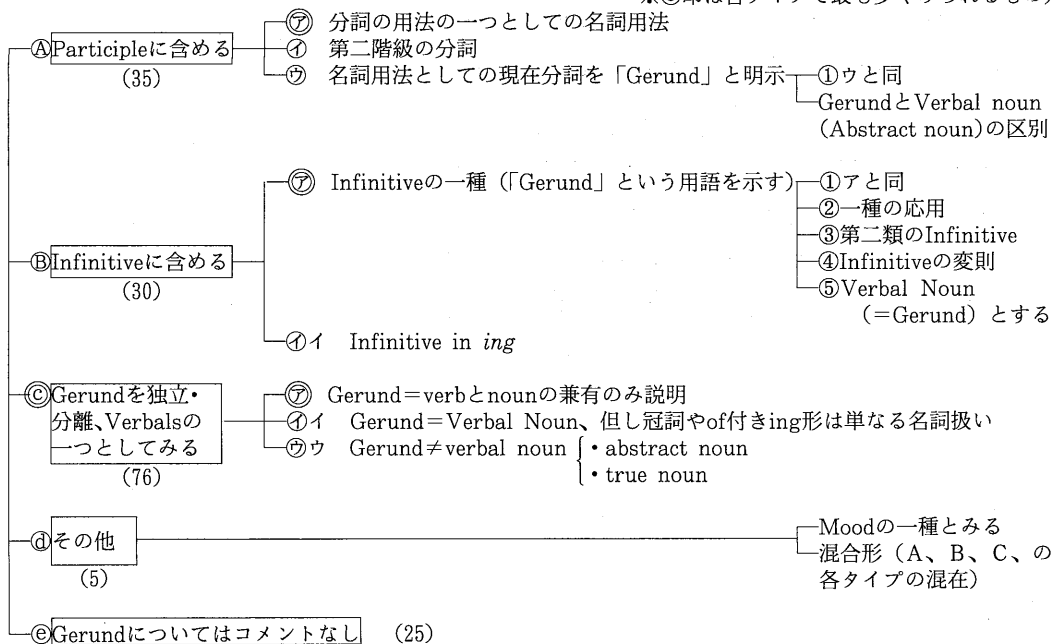
はじめに

英語の‘Gerund’についての概念（ここではGerundの定義・名称・性質・機能または用法を含めた大まかな認識内容を示す）をめぐる、江戸幕末・明治期の諸英文典（英文法書）においては不統一や誤謬等が観察される。これはGerundに限ったことではなく、MoodやInfinitiveなどの文法事項においても多かれ少なかれ言えることであるが、こうした点は、当時の日本における英語受容期ないし英学の初期の時代の諸条件からくる制約や限界が存在した事情を考えると、やむを得なかったと思われる。本稿は、そうしたGerundをめぐる概念が幕末・明治期の英文法ではどのように扱われていたのかについて、当時の英文典を通してその概観を提示し、そのGerundの概念のタイプを分類し、その背景・遠因等を考察することを目的としている。

幕末・明治期の諸英文典（英文法教科書も含む）の171冊を筆者は調査することができたが、その範囲では、Gerundの概念の扱い方のタイプは主として3つに分類できる。それは① Participleに含める、② Infinitiveに含める、③ GerundをInfinitiveやParticipleから独立・分離させ、Verbalsの一つとして扱うである。以上のタイプはその扱い方に応じてさらに細かく分かれる。その状況を表にまとめたものが〈別表Ⅰ〉である。以下に上述の各タイプごとに、それに属する代表的ないくつかの英文典におけるGerundに係わる記述を示し、必要に応じて若干の説明を加えていきたい。なお、英文典の〈 〉の記号は別表Ⅰに対応したものである。最後に「その他」に属する英文典にも触れることにする。なお、各英文典は原則として年代順に示す。筆者が閲覧できた英米の英文典の年代は、日本でその翻刻版が発行された年を示す。発行所は省く。

1. Gerundの概念についてのタイプ

〈別表Ⅰ〉 Gerundの扱いのタイプ



1. 1) GerundをParticipleに含めるタイプ

(A)

② 『暗厄利亚語林大成』、文化11年(1814)、本木正栄、吉雄永保等編〈A-⑦〉

‘…又動静詞上に^エa又は^{エンヂ}an the等の冠詞を附して其下に実詞を置かざるときは則其動詞變して實詞となるなり譬へは尋ヌル^(こと)思フ^(こと)等の如く其尋ね或は思ひの所為を現ハすものなり’ (題言、五丁表) 〈一部現代仮名づかに修正、^(こと)は筆者注〉

この書は我が国最初の英文法論とされているものであるが、上述の引用は「凡例」に示されているもので、動静詞とは Participle の訳語である。

③ 『モルレイ氏英吉利小文典』慶応2・3年?、Lindley Murray 著、渡辺氏蔵版〈A-⑦〉(南雲堂翻刻シリーズ第15巻より)

‘Participles have the same government as, "I am weary with *hearing* him;" "She is *instructing* us;" "The tutor is *admonishing* Charles." (p. 370)¹⁾

この書は、後述する Lindley Murray の *English Grammar* の簡約版であり、1798年に初版が New York で出版されている。親文典同様非常に好評を博し、英米両国、ヨーロッパ大陸等で出版され、日本に輸入・翻刻されたが、その年代がはっきりしない面がある。

④ 『ピネヲ氏原版英文典』、明治2年(1869)、慶応義塾版。〈A-⑦〉

この書では Participle の項で ‘How are participle are parsed’ の問いに対する答えとして ‘adjective and verbs’ と答え、その用例と説明を加えたあと、さらに以下のように示している。‘They may be parsed as *nouns* and *verbs*; as, The ship, upon *entering* the

rapids, sunk, or Upon the ship’s *entering* the rapids, it sunk.

Here, *entering* becomes a noun in the objective, governed by upon, according to Rule IV, and is also a *verb*, governing the objective *rapids* according to Rule III.’ (p. 18)

この書は *Pinneo’s Primary Grammar of the English Language* の抜萃覆刻であり、明治初期の英文典として、直訳書も含め広く利用されたと思われる。

⑤ 『*First Book in English Grammar*』、明治15年(1882)版、G.P.Quackenbos 〈A-⑦〉

‘of (ママ) what is a participle used independently often the object? of a preposition: as, "the art of reading well." (p. 60)、さらに p. 67 に RULE XIII として以下のように述べている。

‘participles are used independently, or relate to the substantives whose meaning they qualify or limit. "There is always a satisfaction in having helped the poor.’

この書は『^格賢^勃英文典直訳』(大学南校助教、明治3年)、『^格賢^勃英文典独学二号』(戸田忠厚訳、明治4年)をはじめ、明治20年頃までにこの直訳書や^(ひとり)独案内と名付けた翻訳書が数多く出版されたものであり、明治前期の日本人の英文法観に Pinneo の書とともに大きな影響を残したと思われる。

⑥ 『英語変格一覽』、明治12年(1879)、王堂チャムブレン (Basil Hall Chamberlain) 著、〈A-⑦〉

‘現在分詞ハ名詞同様ニ他ノ動詞の主又ハ品トナル事少ナカラズ假令ハ Early rising promotes health (早く起ルコトガ健康ヲ勸

ム) Do you like *being shampooed* (汝ハ按摩セララルル事ヲ好ムカ' (p. 31)

① 『*First Lines of English Grammar*』、明治18年 (1885)、Goold Brown著 (※Gooldと印刷されているが、Goldの誤り) <㉠-㉡>

'Are participles always like objectives? No; some participles participate the properties of a verb and a noun; as the word reading is used in the sentence, William is fond of reading stories.' (p. 59)

この書も翻訳書が多く出版され、特に明治20年代頃に日本人に広く利用された。

⑧ 『*More Grammar Lessons for Japanese Students*』明治30年 (1897)、J.N.Seymour著 <㉠-㉡>

'The Particle in "ING" as a noun. The participle may be the subject or object of a verb, may discharge any of the functions of a noun: *Are you fond of teaching children? My being here should make no difference.*' (p. 97)

この書では、Participleの名詞用法として、object、subjectという文の要素を示す文法用語を示している点がこれまで紹介してきた英文典と異なっている。²⁾

⑨ 『*Easy English Grammar and Idiom*』 (『中等英文典』)、明治40年 (1907) M.C.Leonard著 <㉠-㉡>

'A participle may also partake of the nature of a noun; as *Reading good books makes a wise man.*' (p. 150)

この書では、p. 151に注記として、
 to walk } is wholesome exercise.の文例を出して、
 walking }

'The infinitive and participle as used in these sentences are called by some

grammarians, verbal nouns; and the term *Gerund* is sometimes applied to the form ending in *ing*. By other writers both walk and walking are called infinitives' と説明しているのはユニークであり、当時のGerundやInfinitiveをめぐる文法家たちの考え方の実状と不統一さが窺える。

⑩ 『*The Star Series of English Grammars and Exercise Books* (No. 1 ~ 5)、修正版、明治45年 (1912)、エヌ・ウォルター編纂 <㉠-㉡>

'The Present and Present Perfect Participle may also be used as nouns; then they are generally called Gerunds; as *Swimming is a healthy exercise. The boy was punished for having told a lie.*' (No. 3, p. 64)

この書でも、'名詞用法のParticiple'がGerundと一般的に呼ばれていることを明記しているが、このGerundの扱い方・立場は明治30~40年代ではすでに一般的ではなくなりつつあり、GerundはParticipleでもInfinitiveでもなくVerbalsの一種としての扱えるのが、特に明治40年代の趨勢であった。なお、この書は、大阪で出版され、検定教科書として明治40年代に何版も重ねて利用されていたものであることを付記しておきたい。

以上Aタイプに属する英文典を紹介してきたが、上記以外にどのような英文典があるのか触れたいところであるが、紙数の関係で省かざるを得ない (これは以下のB、Cタイプも同様)。ただ傾向としていえることは、Gerundを<㉠-㉡>の扱い方をしているのが大部分であり、それは明治10年代迄の英文典に目立っている。

1. 2. GerundをInfinitiveに含めるタイプ (㊸)

これには、Gerundという用語を示しつつも、Infinitiveの一種と把えるものと、単にInfinitive in *ing* と示すものに大きく分けられる。

㊸ 『*New Language Lessons: an elementary grammar and composition*』、明治17年(1884)年版、William Swinton著〈㊸-㊹-5〉

'The verbals are two kinds: I infinitives II participles.' (p. 101)

'The Gerund—Besides the regular form of the infinitives, the verbal in *ing* is sometimes equivalent to an infinitive: thus—*Reading good books* (to read books) is profitable. This form is called the gerund. The gerund is a verbal noun.' (p. 102)

㊹ 『*A Grammar Containing the Etymology and Syntax of English Language*』、明治18年(1885)版、William Swinton著、〈㊸-㊹〉

'*The infinitive in ing*, called the gerund. (p. 52)

'In form the gerund is identical with the present participle, but is distinguished from that verbal by having the use of noun. thus, "I like *reading* (=I like to read). "You will be rewarded for *studying* mathematics." (p. 53)

㊸、㊹の両書は共にSwintonの著作で、これらが出版されるや多くの直訳書が続々と出されている³⁾。㊸が小文典、㊹が大文典として翻訳され、特に明治20年代に広く読まれたものである。W.Swintonは上記2書、特に㊹で、GerundはParticipleとは異なる点

を明記している点で、㊸に示した諸英文法書、特にMurray、Pinneo、Quackenbosのものとその違いが際立っているが、InfinitiveにGerundを含めている点は現代の英文法から見ると問題になる。

㊺ 『*A Grammar of the English Language for Japanese Students*』、明治14年～15年(1880～1881)年版、W.D.Cox著〈㊸-㊺〉

'The infinitive in *-ing*, may be distinguished from the participle in *-ing*, thus; The Infinitive in *-ing* is a verbal noun, that is, it is merely the name of action, and may be either the subject or object of a sentence, or it may be governed by a preposition; Examples; — Subject: *Reading* is pleasant. Object; He likes *reading*. After preposition: For *attempting* to murder, he was punished. (p. 56)

'Infinitive in *-ing*: writung=writing
Participle in *-ing*: writend=writing
common infinitive: writan=to write'
(p. 55)

この書ではInfinitive *-ing*を特にGerundと呼ぶということには触れていないが、Gerundの扱いについては基本的には上述のSwintonの考え方と同様である。ただし、特にCoxの場合、Gerund、Participle、Infinitiveのそれぞれの語源に触れ、GerundとParticipleの相違を英語史の面から提示しているのは注目される。またInfinitive in *-ing*を通常Infinitiveとは異なる点を語源的に示しているのも特筆されよう。

㊻ 『*英文法神髓*』、明治30年(1897)、酒巻貞一郎〈㊸-㊻-2〉

'不定詞中にGerundと称するものあり、

是れ不定詞の一種の応用に過ぎず、而して Gerund に就き文法家の諸説は粉々として一定せず、或はing形の不定詞を Gerund と云ひ、或は目的（purpose）又は意思を表わす不定詞を Gerund と云ふ⁴⁾。（中略）Gerund は不定詞中の一種応用に過ぎざれば別に不定詞中より区別する必要なかるべし。（p. 173）

◎ 『Elementary Lessons in English』（第Ⅱ巻、訂正再版）、明治33年（1900）、井上十吉著〈㊸-㊿-1〉

‘Infinitive ニ二個の形態アリ a. Verb の純形ニシテ通常其ノ前ニ Preposition タルトヲ置ク者例ヘバto go, to runノ如シ b. 語尾ニ ing ヲ有セル普通之ヲ Gerund ト稱ス’（p. 85）

‘Gerund モ亦 Noun と均シク用イラル、者ナリ例ヘバ I like reading’（p. 89）

‘然レドモ Gerund の情態ハ Infinitive ヨリ一層 Noun ニ近ク恰モ Noun ノ如ク Preposition ヲ前置スルコトヲ得例ヘバ He crossed the river by swimming.（p. 90）

井上十吉の英文典はこれ以外に後述するものを含めて数種あり、教科書として採用されたものが多い。上記の書では、Infinitive の名詞用法と比べ、Gerund のほうが名詞性が高い点を指摘しているのはユニークである。

① 『英文法講義』、明治29年（1896）、足立震太郎著〈㊸-㊿-3〉

この書では、Verbals（動詞ヨリ導カレタル言語）に2種あるとし、それは Infinitive と Participle であることを示し、Infinitive の一般的説明をしたあとでさらに次ぎの様に記述を加えている。

‘第二ハingナル語尾を有スルモノ即チ walking 歩行スル、running 走ル等の

如キ是ナリ第二類の infinitive ヲ Gerund ト云フ例ヘバ I like reading 私ハ読ムヲ好ム Laughing promotes health 笑フヲハ健康ヲ進メル 此二ツノ例ニ於テ reading 及 laughing ハ ing ナル語尾ヲ有シ動詞の性質ヲ持スルノミナラズ名詞の用ヲモナスガ故ニ Gerund ナリ（p. 86、筆者下線）

以上㊸タイプの Gerund の扱い方をする英文典を紹介してきたが、このタイプに属する英文典は明治10年～40年代に亘って見出されるが、どの書をもみても Gerund をなぜ Infinitive に含めているのか、の理由はどうもはっきりしない。これは、Gerund が Infinitive と同様人称・数・時制に制限されず常に -ing 形を有するとともに、名詞的・動詞の特徴を兼有するという、Infinitive との共通性を重視した結果からであろうと推察される。名詞的特徴という点に注目して、同じ -ing 形を持つ Participle には含めなかったと考えられる。

（なお、ここで一言したい事は、Gerund が過去指向、Infinitive が未来指向という connotation の相異にふれた書は残念ながら見出せなかったことである。）

1.3. Gerund を実質的に Participle や Infinitive から分離・独立させ、Verbals の一種とするタイプ（◎）

これには、以下の3つのタイプがある

㊿ Gerund は Verb と Noun を兼有することの説明を中心としたもの、④ Gerund は Verbal Noun であることを明記して説明するもの、⑤ Gerund と Verbal Noun とは異なるものだという区別を立てるもの。

以下、この◎タイプの英文典を7つ挙げておきたい。

② 『*Primary English Grammar For Japanese Student*』(初等英文典)、明治27年(1894)、菅沼岩蔵著 <㉔-㉕>

'A Gerund is a verbal noun from a verb by the addition of ing'; as— 1. *Reading* good books is profitable 2. I love looking it. 3. He got off by *crossing* the river.

Verbal nounトハ動詞作用ト名詞ノ作用トヲ兼有スル言葉ヲ云フ例ヘバ第一例ニ於テ reading ハ動詞ナリ books ナル目的ヲ有スレバナリ之ニ加ヘテ名詞ノ作用ヲ有ス is ナル動詞の subject ナレバナリ故ニ reading ハ verbal noun ナリ' (p. 83)

③ 『*Idiom and Grammar for Middle Schools*』(*English Grammar Series*, 3)、明治31年(1898)、J.C.Nesfield <㉔-㉕>

'A Gerund is a Verbal noun. A participle is a Verbal adjective' (p. 81)

'A Gerund (...) is not only a noun, but also a verb. (p. 82) <* (...) は筆者による中略を示す。>

④ 『*Nesfield's Idioms and Grammar*』(*abridged and adapted for Japanese Students*) 明治31年(1898)、川田正徽、前田元敏編、<㉔-㉕>

'A Gerund,—This is a verb and noun combined. I think of retiring soon form service. Here "retiring" is a verb, because it is part of the verb "retire". It is also a noun, because it is the object to the preposition "of". Hence a gerund has been called a verbal noun. (p. 9)

'(a) I am engaged in the reading of a book(Noun).'

(b) I am engaged in reading a book (Gerund).

In (a) the word "reading" is a single part of speech, — a noun and nothing more.

In (b) "reading" is a double part of speech, — a noun and verb combined.'(p. 134)

⑤は Nesfield 自身の著、④は Nesfield の著書、『*English Grammar Series, Book III—Idiom and Grammar*』を親本にしたものである。Nesfield の英文典は本来学校文法であるが、明治期後半に日本に伝えられて以来非常に好評を博し、その英文典 *English Grammar Series* の翻刻書、翻訳書、抄訳書が多数出版され、明治・大正期の英文法の土台を築いたと言って良い程大きな影響を与えた⁵⁾。この⑤、④の書で、Nesfield は Gerund を Participle や Infinitive から峻別し、Verbal noun とする一方、the reading of ... のような冠詞と of を伴う ing 形は単なる Noun に過ぎないとして、Gerund に含めていない点が特に注目される。これが畔柳をはじめ、後の日本の英文法書で活用され、以下の斉藤秀三郎、神田乃武等の英文典に見られるような㉔-㉕のタイプにおける Gerund の扱い方へと変形していく源となったと思われる。

⑥ 『*邦語英文典*』、明治31年(1898)、畔柳都太郎著、<㉔-㉕>

'Gerund—動詞ト名詞の結合シタルモノ之ヲ名動詞ト稱ス。I think of *retiring* from service. (p. 106)

'(...) 名動詞は全ク分詞ト形ヲ全ウスレドモ是レハ形容詞の一種ニアラズシテ名詞の一種ナリ' (p. 144)

畔柳は、この書で「名動詞」と「動名詞」を区別し、動名詞は the reading of a book の reading であるとしている (p. 145 参照) が、これは Nesfield の考え方と同様である。

ただその名称を動名詞としているのは紛らわしい。畔柳はこの書を著すにあたり、Bain、Nesfield、Swintonなどの諸英文法書を参考にたと述べている。

◎ 『Practical English Grammar』、明治31年（1898）、斉藤秀三郎著〈◎-㊦〉

この書では Gerund が Participle とは異なる品詞であること、また Gerund は Infinitive の名詞用法と置換可能であることを示すとともに、Infinitive との相違を以下の様に示している。

‘Preposition, being unable to govern the Infinitive, must be followed by the Gerund. The Gerund thus supplies the wanting form of the Infinitive after Prepositions, (以下略)。(p. 196)

‘The Gerund, being nearer the Abstract Noun in its nature than the Infinitive, is properly used in making *general statement*; while the infinitive is preferred in speaking of single acts.’ (p. 196)

また、Gerund (infinitive in *ing*) と Verbal Noun in *ing* との区別をしなければならぬと述べ、以下の様にその相異を示している。

‘The gerund, being a double part of speech (Verb and Noun combined), may take any of the Verbal Adjuncts — an Object, a Complement, or an Adverb. It can not be preceded by an Article or an Adjective, but it can be preceded by a Possessive. The Verbal Noun may take all the noun accompaniments — an Article, Adjective, or the Plural Inflection. It can not take an Object or Adverb. (p. 197)

斉藤秀三郎は明治期の英語の巨人であり、

日本の英語教育のみならず世界の英語学界に不朽の貢献をし、斉藤英文法を樹立した偉大な英語学者であることは言うまでもないが、この書は彼の最も有名な著作の一つである。

この書で、Gerund が Infinitive と比べ一般性を有することに触れている点は特に注目される。また、冠詞・形容詞が先行する-ing形は Verbal Noun であって、Gerund ではないことを強調している点は、前述の◎の Nesfield's Idiom and Grammar の p. 134 の説明や、畔柳の‘動名詞’と基本的に同じであるが、畔柳よりかなり詳しく説明をするとともに多くの例を挙げている（例、*The writing of a letter, Good writing, a betraying of the trust*).そして、Verbal Noun の中には、Abstract Nouns（例、*Learning, reading, feeling*）と Common Nouns（例、*A writing, writings, A painting, paintings*）の2種があることを指摘している。The -ing of ~のような -ing は現代英文法では名詞的動名詞としての Gerund とされているが、当時の英文法では、この様な -ing を Gerund に含めない考え方はかなり多くの文法家に受け入れられ、明治30年以降大正期までの多くの英文法書がこれに準じた取り扱いをしている⁹⁾。

㊦ 『Intermediate English Grammar』、明治33年（1900）、神田乃武著〈◎-㊦〉

‘The Gerund is a verbal, ending in ‘ing’ and used as a noun. 故ニ亦 verbal noun トモ稱セラル *Doing* so is quite impossible. He is fond of *doing* such a thing. His *having done* so is a proof of his folly. (p. 84)

㊧ 『Higher English Grammar』、明治33年（1900）、神田乃武著、〈◎-㊧〉

‘A distinction is sometimes made between

a Gerund and a Verbal Noun, which, though derived from the verb, is used in a purely noun-construction.

Gerund	Verbal Noun
(Double use of a verb and a noun)	(single use of a Noun)
Learning English is a difficult thing.	The learning of English is a difficult thing.
(以下略) (p. 148)	(以下略)

①と⑧は共に神田乃武の書ではあるが、中等英文典に価する①の書と高等英文典に価する⑧の書では、Gerundの扱い方に程度の差が見られ、⑧の書では冠詞と前置詞 of を伴う -ing 形は Gerund ではなく、Verbal Noun であると区別しているのに、①では Gerund は verbal noun であることに触れながら、それ以上は深入りしていない。これは、intermediate の段階ではあまり学習者に混乱を与えないようにしたほうがよい、という配慮が働いていると推察される。なお、神田乃武は、斉藤秀三郎、井上十吉と並び称せられる明治英学の大家であり、多くの英語教科書を書いており、明治後期以降の英語教育に大きな影響を残している。

⑨ 『*English Grammar for Use in Middle Schools*』、明治36年(1903)、井上十吉著 <◎ - ④>

この書では、Verbals (轉用動詞) には Infinitive、Participle、Gerund (名詞狀動詞) の三種を挙げ、Gerund については以下の如く定義し、説明を加えている。

'The Gerund is a verbal noun and names the action denoted by the verb. 他動詞の名詞狀動詞は名詞トシテ用ヒラレナガラ、目的辭ヲ採ルコトアリ。名詞狀動詞の語尾ハ ing ナリ、例ヘバ、I like reading. He

escaped by crossing the river. The drawing of the cat was very cruel act. (p. 74)

井上十吉は、上述の 1. 2. の①の書、*Elementary Lessons in English* (明治33年) では、Gerund を Infinitive の中の一形態としていたのが、この *Elementary Lessons* が出版されてわずか3年後のこの *English Grammar for Use* では、Gerund を Verbals の一種として Infinitive とは区別している。この点は確かに矛盾しているが、そうした理由は定かではないとしても、*English Grammar for Use* では Nesfield や 斉藤秀三郎、神田乃武の英文法書が当時すでに出版されており、それらの Gerund の新しい考え方に影響を受けて、Gerund を Infinitive から除いたのではないかと推察される。当時の英文法家の出した書の中には、なかなか自説を曲げず、新しい考え方が出てきても、それに同調せず、改定修正版を出してもそれを改めないという場合もかなり見受けられるが、井上十吉はそのあたりかなり柔軟であったと思われる。

⑩ 『*Outlines of English Grammar*』、明治44年(1911)、岡倉由三郎著 <C - ア>

'He boasted of his own great speed in running. の running は動詞にして而も名詞の如き意味を有す。かく名詞 (體言) の性質を有する動詞 (用言) を體用詞 [Gerund] と云う' (part 2, p. 244)

岡倉由三郎が Gerund を動名詞と訳さず、日本語の文法用語を利用して '體用詞' と訳した最初の人であろうと思われるが、なかなか工夫をした名訳であろう。この訳は、すでに彼がこの書以前に出した、いわゆる 'ぐろうぶ文典' において既に使用している。Gerund を體用詞と訳すのは、大正時代以降昭和初期

まで、多くの英文法教科書でも採用されている。なお、‘ぐろうぶ文典’では Gerund と Verbal Noun（動詞的名詞）を区別している。

以上 Gerund の扱いについて、㉔タイプに属する英文典を紹介してきたが、傾向としては㉔の中の㉗扱いをしている英文法書が比較的多いが、同一人物の著した英文法書の中でも、初等、中等、高等の程度により、㉗か㉘の段階までより詳しく触れるという場合もよく見られる。

筆者の調査した範囲では、この㉔タイプに属する文法書は全体の50%強であった。ということは明治後半に入って、Gerund が現代英文法の考え方と同様に認識され、徐々にその概念が統一の方向へ進み始めたと見ることができよう。

1. 4. その他の Gerund の概念

これは数は少ないが以下の2つのタイプに分かれる。

1) 法 (mood) に含める

㉔ 『A Intermediate English Grammar: 中等英文典』、明治31 (1898)、井上十吉著<㉗-㉘>

‘不定法は前四法と異なり数と人稱を有せず唯事物の動作及状態を表示する法なり 之を細別して不定動詞 (Infinitive) 動詞状名詞 (Gerund) 及分詞 (Participle) の三種とす。 (p. 85 - 86)

井上十吉は、Gerundの扱いについて、1. 2. の㉗の書では Infinitive に含め、1. 3. の㉘の書では Verbal Noun とし、Infinitive とは区別しているが、この中等英文典は不定法に含めている。この様に井上十吉の Gerund の扱い方・概念は揺れているが、中

等英文典の方が先に出されており、この時点ではまだ Gerund は‘法’であるという観念から脱却できていなかったとしても、後に出版された、㉗、㉘の書では Gerund を法に含めることはしておらず、㉘の書では Verbal Noun として修正を加えている。この様に Gerund をどう把えるかは当時の英文法家にとって混乱するほど厄介なものであったことがこのことから窺える。

なお、この書では動詞状名詞 (Gerund) と名詞状動詞とを区別し、By the observing of this rule, he succeed in his object. の文におけるような the ~ing of… の ~ing を名詞状動詞としている。⁷⁾

㉔ 『英文典ダイヤグラム』、明治39年、(1906)、松浦興三著’

Infinitive、Gerund、Participle、共ニ mood と称スベカラザレド暫ク便宜ニヨリ茲に掲グ。(p. 24)

2) Gerund を Infinitive か Verbal Noun や for ~ing 形のどれかに該当させる混合形

㉔ 『A First English Grammar』(1872年初版)、明治20年 (1887)、Alexander Bain 著

この書では ‘Walking is better than running.’ の running を infinitive in ing とし、‘The act of walking’ and ‘act of running’ の ing 形を ‘a transferred participial form’ と呼んでいる (p. 131参照) さらに以上の ing 形と異なるものとして以下のごとく述べている。

‘There is also a **verbal noun** in’ ing’: there came a moaning on the wind; the sighing of the tempest. It has all the distinguishing marks of the noun, and differs from Infinitive of the same form (1) in taking the

indefinite article before it, and (2) in not taking an object after it.' (p. 132)

'Gerund is the infinitive form used with the sense of *purpose or intention*: I went to meet him; (中略) made for selling; armed for fighting' (p. 133)

この書で Bain は Gerund という用語を the act of walking や the sighing of the tempest の中の ing 形に対して使用していない。Gerund は目的・意図を表す to 不定詞か for ~ing にのみあてはめ、しかもこの ~ing 形を Infinitive form としている。この部分が明治43年出版のイーストレーキ、増田藤之助の『英文法十講』の Gerund とゼラントに関する説明の根拠となっている。⁸⁾ いずれにせよ、本来の Gerund が、Bain の書では Infinitive in *ing*, verbal noun in *ing*, for ~*ing* のどれかに分散して登場していると実質的には考えられる。

以上 Gerund の扱いをめぐる、幕末・明治期の英文法書の4つのタイプを例を挙げつつ提示してきたが、まことに Gerund の概念を把握することは厄介な事であった様子が窺える。なお、Gerund に関する記述が見出せない英文法書もかなりあったことを付記しておく。⁹⁾

3. 18世紀欧米の英文法家の Gerund の概念

と、その幕末・明治期の英文法への影響

幕末・明治期の初期の頃に人々が用いた英文典はオランダ語による英学書や、英米で出版された英文典の翻刻書や翻訳書または解説書のようなものが中心であった。そうした英文典の内容の土台となったのは主として18世紀のイギリスで隆盛であった、ラテン文法の影響の強い伝統文法(規範文法)であり、こ

こにその文法を代表する三名の英文典における Gerund の扱いの記述を以下に紹介し、さらに18世紀のアメリカの英文法家、Noah Webster の文法書についても付記しておく。

1) 『*A Short Introduction to English Grammar*』、Robert Lowth 著、1762年初版(以下の記述は1769年版の翻刻版による)¹⁰⁾

'The participle with a Preposition before it, and still retaining its Government, answers to what is called in Latin the Gerund: as, "Happiness is to attained, by avoiding evil, and by doing good; by seeking peace, and by pursuing it."

The participle with an Article before it, and the Preposition of after it, becomes a Substantive, expressing the action itself which the verb signifies: as, "These are the Rules of Grammar, by *the observing* of which you may avoid mistakes' (p. 76)

2) 『*The Rudiments of English Grammar*』、Joseph Priestley、1761初版(以下の記述は1769年版の翻刻版による)¹¹⁾

'Many nouns are derived from verbs, and end in *ing*, like participles of the present tense. The difference between these nouns and participles is often overlooked, and the accurate distinction of the two senses not attend to. (p. 93)

3) 『*English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners*』、Lindley Murray 著、1795年初版(以下の記述は1806年版の翻刻版による)¹²⁾

'Participles sometimes perform the office of substantives, and are used as such; as in the following instances: "The *beginning*," "a good *understanding*," "excellent *writing*;"

"The chancellor's *being attached* to the king secured his crown:" "The general's *having failed* in this enterprise occasioned his grace;" "John's *having been writing* a long time had wearied him.' (pp. 79 - 80)

4) 『*A Grammatical Institute of the English Language*』、Noah Webster 著、1784年初版（以下の記述は1787年版の翻刻版による。）¹³⁾

'A participle, with a preposition preceding it, answers to the Latin gerund, and may govern an objective case.' (p. 49)

上述の gerund の例として、by avoiding evil, in observing them, for esteeming us などを示している。(p. 49参照)

'But a participle with an article before it, generally has the nature of a noun and requires the preposition of after it. By the avoiding of evil (以下略) (p. 49)

'The participle in *ing* often have the nature both of nouns and verbs. They are preceded by an article, a noun, or pronoun possessive, and yet govern the objective case. These may be called *participial nouns*.' (p. 50)

Rowth は、前置詞に先行される Participle のみを Gerund と呼んでおり、冠詞を伴う Participle を Gerund とはしていないが、いずれにせよ、名詞用法の ing 形を Participle の一用法として扱っている。Murray は Rowth の規範文法を継承発展させた人であるとされているが、Murray は上の記述において Gerund という用語は示していないものの Participle の中に名詞用法の機能を含めている。Webster はイギリスの規範文法にあきたらず、日常の口語用法に注目し、論理

より経験を重視した革新的な文法観を持つ辞書編纂家として大成した人である。¹⁴⁾ その彼が、上記の彼の文法書の Gerund に関する扱いは Lowth の説を踏襲して、前置詞が先行する Participle と冠詞が先行する Participle を区別しており、さらに彼は通常の participle in *ing* を取り上げ、名詞と動詞の両性質を有するものを特に *participial noun* と名付けている点が特徴的である。

一方 Priestley の英文典の上記の記述の中には Gerund という用語は見えないが、ing 形の名詞用法を Participle に含めていない点は、上記の他の文法家と比べ出色であるが、この点は後の規範文法諸家においてあまり顧みられていなかったようである。

江戸末期や明治期の前半までに海外から日本へ輸入されてきた英米の文法書は、Murrayをはじめ、Pinneo、Quackenbos、Brown などの、規範文法かその影響の濃いものであり、その翻刻書や翻訳書を通して学習した当時の日本人々は、そこに示されている本家本元の英文法を信じ、それに基づいて考えていかざるを得ないというのが自然であろう。したがって Gerund の概念についても、Gerund を Participle に含める④タイプの扱い方が、明治10年代までは主流となっていたのも当然であり、18世紀のイギリス規範文法の考え方が底流となって日本の英文法家にも最大の影響を及ぼし、その呪縛にかかって、なかなか Gerund を Participle から開放することができなかったのではないかと考えられる。

おわりに

おおよそ幕末・明治期の英文法での Gerund の扱い方の状況を年代的に概観する

ならば、上述したごとく、まず④タイプの考え方から初まり、それが明治末期までその命脈を保った。次に Swinton、Cox の英文典の影響を受けて、明治10年代後半になって、③タイプの Gerund を Infinitive に含める考え方が生じ、明治20年代にはそれが主流となり、明治末期まで続く。明治30年から明治末期までは、主に Nesfield 英文典から影響を受けて③型の Gerund の考え方、すなわち、現代の英文法の概念に近いか、同じものが主流となり、Gerund の概念がかなり統一され始めてきた。この③タイプが大正昭和時代に継承されていったわけである。そこで、おおよそ明治30～40年代にかけて、Gerund の考え方は、④、③、②、その他の4つのタイプが混在していたと言える。当時の英語学習者にとって見れば、Gerund は諸説粉々として誠に混乱したに違いない。ではなぜそのような混在する現象が生じていたかと言えば、それはやはり、Gerund というものの形態・性質・統語的特徴が同じ verb から生まれ、共通性や類似性を持った Participle、さらには形態は異なっても同じ名詞性や動詞性を有する Infinitive に引きづられ、その共通性に縛られて、英米を含めて日本の英文法家たちもそこから容易に脱却し得なかった結果、そうした状況が生まれたと思われる。Nesfield の Gerund の考え方が明治後半期に移入されてきても、なおそれが必ずしも当時の英文法家にすべて受け入れられなかったのは、上述の事情があったからであると考えられる。

そもそも Gerund の史的発達という面を考慮すると、上述の特に Participle が Gerund に含めるという混同の遠因が納得できるであろう。OE において Participle の語尾は -ende であり、それが Gerund の語尾 ing と

が [in] という共通音による音的融合から、Participle の語尾も -ing になるにつれて、本来名詞的性質しかなかった Gerund が、徐々に分詞の動詞的機能を取り込むようになった、つまり、Gerund と Participle とがそれぞれの属性の一部を交換し合った結果生まれてきたのが動詞的機能を持つ Gerund であったわけである¹⁵⁾。そうした背景から、Gerund と Participle の区別がつきにくく混乱が生じやすいのもうなづける。

Gerund を Mood (法) に含める考え方というのも一見奇異ではあるが、これも規範文法家が Infinitive を Mood に含めていたことを考えると理由なしとは言えない。法という概念は、話者が抱く心的態度であり、それが動詞の形態に反映されるものであるのに、法性を持たない Infinitive を規範文法書や明治の英文典の多くが、法の範疇に含めてしまった以上¹⁶⁾、Gerund も Infinitive 同様人称・数・時制に制限されない non-finite verb であるから Mood に含めてもよいのではないかと考えるのも理解できる。

本論では、幕末・明治期の Gerund の扱い方を概観し、その不統一性と背景などを述べてきたが、触れられなかった点も多い。例えば、上記以外の明治期の多くの英文典や、Gerund をめぐる訳語の変遷などがある。それらは別の機会に述べることができることを願っている。

(以上)

注

- 1) *A Reprint Series of Books Relating to the English Language*, Vol.19, 南雲堂, 1971.
- 2) Seymour は、Gerund という用語は知っていたが、ここでは学生の混乱を考慮してあえて Gerund という用語を示していないと思われる (more grammar Lessons for Japanese Students, p. 97 参照)。
- 3) Swinton の翻訳書として、まず『スウィントン氏英

語学新式直訳』（斎藤秀三郎訳、明治17年）が挙げられる。他に『英文典直訳・スウキントン氏著』（斎藤八郎、明治20年）などがある。

- 4) この説は、後述する1. 4のAlexander Bainの*A First English Grammar*、p.133の記述から取ったもの
- 5) 出来成訓、『日本英語教育史考』、p.333、参照
- 6) 斎藤秀三郎の『*English Grammar for Beginners*』（「英文法初歩」、明治33年）では、'Gerundハ動詞ヨリ作レル名詞ノ一種（Verbal Noun）'（p.161）と述べ特にGerundとVerbal Nounの相異に触れていない。初歩的な英文法ではそこまで踏みこんで学ぶ者を混乱させたくないと考えたからであろうか。
- 7) 井上十吉、『*An Intermediate English grammar*』（明治31年）、pp.267 - 268. 参照。
- 8) イーストレキ、増田藤之助、『*英和比較英文法十講*』（明治43年）、pp.135 - 136. 参照。
- 9) 例えば、『英文法初歩』（花輪虎太郎著、明治35年）ではGerundに関する記述は見当らなかった。
- 10) *A Reprint Series of Books Related to the English Language*, Vol.13, 1971.
- 11) *ibid.*, Vol.14, 1971.
- 12) *ibid.*, Vol.19, 1971.
- 13) *ibid.*, Vol.16, 1970.
- 14) *ibid.*, Vol.16, p. 377参照
- 15) 児馬修、『*ファンダメンタル英語史*』（ひつじ書房、1996）。pp.107 - 109.
- 15) 水野修身、「幕末・明治期の英文法書における'infinite'の概念とその訳語に関する実情。背景」（『富士フェニックス論叢、第4号、1996）、参照。

主要参考文献

- 荒木一雄・林哲郎・安藤貞雄. 1989. 『英語学の歴史』 英潮社新社.
- 井田好治. 1975. 「『あんげりあ語林大成』の英文法論」 『英学史研究』、第8号.
- 乾亮一. 1954. 『英文法シリーズ、分詞・動名詞』 研究社.
- 児島修. 1996. 『ファンダメンタル英語史』 ひつじ書房.
- 出来成訓. 1994. 『日本英語教育史考』 東京法令出版.
- 豊田実. 1963. 『新訂・日本英学史の研究』 千城書房.
- 大塚高信・中島文雄（編）. 1982. 『新英語学辞典』 研究社.
- （本文中に引用した幕末・明治期の文献はすべて省略）